慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	モラゼ著 湯村・竹岡訳 経済史入門
Sub Title	
Author	渡辺, 國廣
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.8 (1961. 8) ,p.729(119)-
JaLC DOI	10.14991/001.19610801-0119
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610801-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

渡部正一著『日本近世道徳思想史』

明治維新による近代化への開幕とともに、富国強兵・文明開化・殖産興業の国是に従い西欧文明摂取への旺盛な意欲、それに十分な能力を発揮し得たことの背景には、それらがすでに江戸時代の人々の心性の中に準備されていたこと（序論）、しかもこのことが、国外とくに西欧文明に接触しながら自国の文化を自由に展開することのゆるされない、鎖国下の、いわば閉ざされた思想環境の中で行われたこと、そして江戸時代の人々によって過去の精神的遺産をうけつぎ自足自転しながら、ヨーロッパに見られるような十七・八世紀の思想的諸契機を、何らかの形で生み出すことが出来たこと（序）という根本的理解に立って、著者は「道徳という根本の視点から、内面的自覚の深まりと、外面的自由の拡大への志向という二つの視点をもって、近代化の諸相を思想史的事実に即して明らかにして行く事」（序論）を目的として本書を叙述している。

とくに著者は近世的ないし近代的な性格を顕著に現した思想の諸相を、現実的実用的道徳観の展開、功利的道徳観の自覚、科学的精神の自覚、および主情主義的道徳観の自覚を通して解明せんとし、実用性、功利性、科学性、および主情性等を契機として重視する。この場合、著者は江戸時代の「封建的」思想環境の中に、これら異質的な諸契機―思想が、如何なる基盤の上で発生して来たかと自問し、それが終極的には「商品経済の進行に伴う社会経済的事情の変化」に求められると考えながらも、それを思想史の領域で検討し、それを「商人階級のもつ生活意識」に求めた。この生活意識が持つ種々なる契機が、他の諸思想の展開―変質の動力となったと考え、ここに土台を置いて、他思想の展開を解明する視点としたのであって、此点多くのすぐれた示唆をふくんでいると思われる。

本書の内容は第一章儒教倫理の展開（とくに朱子学が幕藩体制絶対化の理論的・道義的な柱たりえたとの理論に討しての否定的批判、儒学の展開の中に実学への徹底、反封建的な近世的（近代的）思想の性格を把握せんとする叙述は興深い）。第二章武士道徳思想の展開（儒教的な「士道」の成立、平和時における町人文化の影響をうけつつ武士のあり方の変化と、武士の倫理観の変質の叙述、第一章の具体的展開の場である）。第三章功利道徳思想の展開（本書の中心部分であり、最もすぐれた研究であると思われる。町人生活の変化に即して展開した町人意識、それが思想上の動力となって、他の思想を変質せしめ、又新しい思想を発生せしめて行ったことの検討、儒教思想の修正も町人意識の反映とみた）。第四章科学的精神の展開（町人意識に示した実証的学問精神、それとは系譜を異にした西欧科学思想の輸入、「洋学」とその影響、これが町人意識にも影響を与えたこと、しかし、西欧思想を受容しうる思想的根拠のあったことの重視）。第五章主情主義的道徳思想の展開（ここでは「国学」のもつ性格が論ぜられ、国学の科学的学問精神、人情の自然の認識、国家主義的な道徳観の方向が論及される）。

わが国道徳思想の研究は村岡典嗣博士、和辻哲郎博士、家永三郎博士等によりいちじるしく発展せしめられて今日に至ったが、ここに本書が出版され、新しい構想の下に江戸時代の諸思想の性格と展開とが検討されるに至った。江戸時代経済思想の研究に志す人々に対しては勿論のこと、多くの人々に読まるべき好著である。（昭和三六年三月発行・創文社・A5・三四五頁・九〇〇円）

―島崎　隆夫―

＊　＊　＊

モーラ・ゼ著　湯村・竹岡訳『経済史入門』

本書は普通いうところの経済史の入門書と違う。そこに展開されているのは広く歴史の方法とでもいったらいいか。著者は経済史をかなり広義に解する。「人間を取巻く物質的条件、これらの条件を作り出す自然的・人間的諸原因の進化の、そしてまたこれらの条件が社会と人間や集団の心理の諸形態の発展に及ぼす帰結の、歴史」（二五ページ）とみる。いわば経済史で問題は人間の運命にかかわることであり、著者によれば、その解明のため経済史は綜合の科学であることを要請された。「すべてのものは相互に関連しているが、この連帯性の観念こそ我々の部分的な研究すべてを通じて手引の役目をするものである。この観念を我々は結合と名づけたい」（三九ページ）。そして著者はこの結合に重大な意味を与えるのであった。綜合史家として経済史家は地理学に、言語学に、そのほか万般に精通していなければならない。しかし綜合史家たる者の重大な責任は相互連関のなかで何が重大な要因であるかを確定してかかることにあった。著者は精神的要因にすべてを賭ける。「革命的誘因が存在したとしても、それを現象せしめたのは工業の新しい技術ではない。新技術が革命的誘因を刺戟できたとすれば、時代思潮の賜物であった」（八四ページ）。また著者は「哲学の進歩が先行し、科学の進歩と工業の進歩を誘った」（一〇〇ページ）とも考えている。この観点からすれば、中世における商業の復活も、「冒険・好奇心・習慣の変化による贅沢や新しもの好きの精神の発達、好奇心によってもたらされた新しい形態の勇気の誕生」（二〇一ページ）に帰せらるべきものであった。十九世紀を通じて労働者の間に自由の観念にかわり連帯性の観念が出現したのは、著者によれば、肉欲的享楽のためよりよく獲得しようという心情から発したのであった。一四六―一四七ページを参照。

経済史で問題は人間の運命であり、それについての適確な判断は経済史家が綜合史家となって達せられる。ところで人間の運命の展開は人間の心情によって惹起せしめられる。この心情がどういう経緯で現れて来るのか。著者はこれについてまったく触れようとしない。心情にすべてを帰すること、この点は理解できなくはない。しかし著者においては若干度が過ぎてはいないか。かなりいい訳文になっている。しかし引用に際しては全体の調子の都合で、若干改めさせていただいた。（昭和卅六年五月刊・創元社・B5・二二七頁・三五〇円）

―渡辺　國廣―